

国語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

すべての生き物には、どこまでが「私」なのかという問題が生じます。生き物はすべて、「私」という範囲を持つているはずですが、哲学的なことを言っていますが、生物にとって「自己」と「自己」の区別は本質的な問題で、自分はこの範囲までなのか何らかの形で決まっていなくて、「自分が有利になる」という行動をとりたいたときに、どこまでの範囲にとって有利になるようにしたらよいのがわからなくなってしまうからです。したがって、「個体」が得をするように進化が起きているのですから、どこまでが一つの個体なのかは何らかの形で保証されているはずで

す。

そんなの簡単じゃないか、私の体の範囲までだろうって？ 確かに動物は個体がわかりやすいですね。しかし、植物では、種からではなく、地下に伸ばした根から地上部が生えていて、いくつもの地上部が全部地下でつながっている遺伝的なクローンであるようなものが存在します。たとえばササがそうですが、こういった構造をしている場合、どこまでが「個体」なのでしょうか？ 地上部は一つひとつは栄養分や日光をめぐって競争関係にもあるわけですから、それぞれが個体かもしれません。しかし、地下ではつながっているので、全体が一つの個体なのかもしれないですね？

アリや人間の社会では、社会を構成する個体は遺伝的に異なった個体ですから、「個体」と「社会」は同一のものではないでしょうが、こういった植物の個性性というのははっきりしません。おそらく、その生物のどのような問題について考えるかで、個体の範囲が違ってくるかとも考えられます。たとえば、「2つの地上部でどちらかの日当たりが悪くなったときに、そちらへの栄養物のキョウキュウを止めて、もう一つの方の葉っぱを増やす」ということがあれば、群体全体が一つの個体でその中でそのような調節が行われていると考えた方が都合がよいでしょう。しかし、互いの個体の間で、相手の上の空間を葉で覆いカクして日光を奪おうというようなことがあるとすれば、各地上部を独立した個体として見なければうまく説明がつかないでしょう。

どこまでが「私」という問題は、スパッと割り切れるようで実はそうではないのです。

また人間には、「私」という意識がありますが、小さな生き物がそのような意識を持つていかどうかは不明です。イヌくらいになるとどう見ても意識があるようにしか見えませんが、ちっぽけな虫はどうでしょう。しかし意識がないにしても、そのような虫は危険を避けようとしていたり、エサをツカまえると自分だけで食べようとしていたり、「私」を認識していると思われる行動をとります。意識がないとしたら、いったい何がそのような統一性をもたらししているのでしょうか。

こういった問題は、バラバラの個体を見ているよりも、社会を作る生き物で、社会の範囲がど

うやって決まっているのかを見ていく方がわかりやすいかもしれません。社会は「私」の集合ですが、個体の範囲と同様に、「どこまでを『我ら』として捉えているのか」という問題が生じます。個体の場合とまったく同様に、アリのコロニーのような社会は、他の生物や同種他コロニーと競争関係にあります。

I、「我ら」全体の統一性にモトづいて行動できないと、他者に負けてホロビてしまうでしょう。また、「我ら」を識別できないと、「我ら」でないものと協力してしまい、利益を得られなくなります。血縁者と協力することが必要な場合には、血縁者でないものを「我ら」としてしまおうとソク^クをすることになります。最初はただ単に親のハチがホ^ケった穴に居残って子育てしているだけで、「我ら」という認識がなかったとしても、「我ら」を確保するような何らかの機構が一度出現すると、それはその有利性ゆえに集団に拡^{ひろ}がり、進化していくはず^cです。つまり「我ら」という認識をもたらず機構が進化するのですが、そのような機構がどんなものであるかということについていくつかの生物でわかっていますから、それを見ていくことにしましょう。

集合性の蛾^がの幼虫では、フェロモンが集合の統一性を保つのに役立っています。フェロモンが引かれた範囲から外に出てしまうと、イモムシはとたんにおどした様子になり、結局フェロモンがつけられた範囲内にモド^{もど}ってしまいます。このような行動が、集団をバラバラにさせず、IIを保たせています。イモムシは自分たちのフェロモンの匂いに強く反応しますが、フェロモンの匂いが集団ごとに少しずつ違っているとすれば、それは集団が自分たちを「我ら」と認識するためのメカニズムになっていると考えられます。

アリではこの問題はもう少し詳しく調べられていて、巣ごとに体の表面の匂いが違っていることがわかっています。この匂いの元は頭部にある分泌腺で作られる体表炭化物という化学物質であると推定されており、遺伝的に決まっている成分と環境から獲得した成分が混じり合って使われるようです。アリがお互いを舐^なめ合ったり、口移しでエサを分け合うときに、コロニーのメンバーで同じ匂いが共有されるようになっていくのです。アリはこの匂いが違う個体を攻撃するので、この匂いは「我ら」と「奴^{やつ}ら」を見分ける機構として働いています。アリは匂いで「我ら」の範囲を決めています。巣の外へ出ない個体もたくさんいるわけですから、暗闇で目に頼らず匂いに頼っているのはIIIなことです。ともあれ、彼らは「我ら」を認識しているのです。

アリと同じく社会性ではあるものの、暗闇ではなく開けた空間に巣を作るアシナガバチでは、巣仲間の他の個体を顔にある模様により、視覚的に見分けていることがわかっています。それが「我ら」のサインとして用いられているかどうかはわかりませんが、顔見知りであることは判断しているのです。

カラスでは、いつも同じ場所に集まる個体とそうでない個体を声で聞き分けており、暗幕の向こうからいつも聞いている個体の声を聞かせると暗幕の向こう側を覗^{のぞ}こうとしますが、知らない個体の声だと反応しません。この話を聞いて、キャンパスにいるカラスの声を注意して聞いてみ

ると、確かに声に個性がありました。この場合も、声によつて個体を聞き分けており、「我ら」であるという認識も行っているようです。

人間では「我ら」の認識は、一義的には顔見知りであるかどうかで決まってくると思われます。大昔は集団サイズの小さい部族社会でしたから、知り合いの顔は容易に覚えられたでしょう。今でもほとんどの人が顔見知りのような地域共同体に住んでいる人は、このことを実感しているでしょうし、大きな都市でも、戸建て住宅がたくさんあるような地域では、ご近所の方の顔を認識している場合が多いはずです。

人間が覚えられる顔の数には限界があり、あまりにたくさんだとわからなくなるようですが、日常的によく知っているというレベルだと80人くらいまでなら大丈夫なようです。

ちよつと面白い例ですが、西洋人は建物やエレベーターなどの中で知らない人にも挨拶^aをしますが、日本人は知っている人のときにのみ**会釈**^bをします。文化的な解釈では、西洋人は挨拶により「X」ということを示しており、日本人は「Y」ということを示しているそうです。つまり日本では、会釈は「我ら」のサインとして使われているわけです。

おそらく農業が発達してからのことでしょうが、集団が顔見知りの限界を超えて大きくなってからは、「我ら」の範囲は町や市、県、国といった行政上の制度によつて決まっているように思えます。この制度は「我ら」の範囲を顔見知りだけの範囲から拡張するのに役立ったことでしょう。

（長谷川英祐『働くアリに幸せを』による。問題作成の都合上、省略した箇所がある。）

問1 二重傍線部ア～コのカタカナを漢字に改めよ。（楷書で記すこと。）

ア	ヒ	1
イ	キョウキユウ	2
ウ	カクシ	3
エ	サケ	4
オ	ツカまえる	5
カ	モトづいて	6
キ	ホロびて	7
ク	ソン	8
ケ	ホった	9
コ	モドって	10

問2 傍線部 a・b の漢字の読みをひらがなで記せ。

a	挨拶	11
b	会釈	12

問3 空欄 I Ⅲ に入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれ

ぞれ一つずつ選べ。 I 13 II 14 III 15

- | | | | | | |
|-----|-------|---------|--------|-------|--------|
| I | ① つまり | ② したがって | ③ あるいは | ④ しかし | ⑤ たとえば |
| II | ① 多様性 | ② 一貫性 | ③ 一体性 | ④ 機動性 | ⑤ 可能性 |
| III | ① 意識的 | ② 一時的 | ③ 計画的 | ④ 致命的 | ⑤ 合理的 |

問4 空欄 X・Y に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうち

から一つ選べ。 16

- | | | |
|---|-----------|------------------|
| ① | X 敵意はないよ | Y あなたは敵でも仲間でもないよ |
| ② | X 仲間になろうよ | Y あなたを仲間だと思っているよ |
| ③ | X みんな仲間だよ | Y あなたも仲間になろうよ |
| ④ | X 敵意はないよ | Y あなたを仲間だと思っているよ |
| ⑤ | X みんな仲間だよ | Y あなたは敵でも仲間でもないよ |

問5 傍線部 A「生き物はすべて、『私』という範囲を持っている」とあるが、この事実からどのようなことが導かれるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ

選べ。 17

- | | |
|---|---------------------------------------|
| ① | 生物が「私」と他者をどのように区別するかは哲学的に説明される問題である。 |
| ② | 生物は「私」の範囲が決まっていることで自分に有利な行動をとることができる。 |
| ③ | 生物は「私」の範囲が決まっていたとしても認識することができない。 |
| ④ | 「私」の範囲は見た目ではなく遺伝子レベルで判断されるべきである。 |
| ⑤ | 「私」の範囲を本質的に解明しないと個体の進化について説明できない。 |

問6 傍線部B「スパッと割り切れるようで実はそうではない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。18

① 生物によつては個体の範囲がはっきりしておらず、個体が自分によつて有利な行動をとることができずに生命の安全が守られない場合があるから。

② 個体の区別がはっきりしたアリや人間とは異なり、植物では地上と地下の部分を一つの個体と見るか独立した個体と見るか、わからない場合があるから。

③ 個体の範囲の明確性は生物の生存に関連している問題にもかかわらず、群体をつくる生物では、個体の範囲がはっきりと決まっていない場合があるから。

④ 一つの群体に見えるような植物でも、その中で生物どうしがどのように作用し合っているかによつて別々の個体として判断される場合があるから。

⑤ 動物と植物のどちらの場合でも、生物自身が認識する個体の範囲と生物学的に判断された個体の範囲とが異なる場合があるから。

問7 傍線部C「『我ら』という認識をもたらす機構が進化する」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。19

① 生物の進化は個体や集団に有利な方向に進むものであり、「我ら」を認識することは他者を見分けることにつながり、生存競争において有利に働くものだから。

② アリなどの社会を構成している個体はそれぞれ遺伝的に異なる個体であるが、「我ら」を認識できなければ「個体」と「社会」が同一化してしまうから。

③ 集団の存続のためには「我ら」以外の敵を識別する必要があるので、視覚的に敵を認識することができめるメカニズムは集団にとつて有利性を持つから。

④ 他の生物や集団との生存競争においては社会の範囲を的確に認識することが必要なので、個体には「我ら」を認識する機構が優先的に出現するようになっていくから。

⑤ 社会性のある生物の場合、集団全体のために協調して働く個体だけが生き残り、協調性を持つ個体が増えて進化が進むと考えられるから。

問8 傍線部D「『我ら』のサイン」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤

のうちから一つ選べ。

20

① カラスの声のように、それぞれの個体に特徴があり、特定の個体だけに興味を示してそれ以外の個体は異なる生物として認識するというような、集団における個体の独自性を示すもの。

② アリの体の表面の匂いのように、巣ごとに成分が異なり、集団でその匂いを共有して自分たちと違う匂いを持つ個体を排除することができるというような、協力すべき集団の範囲を確定させるもの。

③ ササの構造のように、別々の個体に見えても生存の危機の場合には一つの個体として助け合い、栄養の確保のために協同するというような、集団の存続のために役立つ働きのこと。

④ 蛾の幼虫の匂いのように、集団ごとにフェロモンが異なり、自分たちのフェロモンが引かれた範囲内だけでしか行動できなくなってしまうというような、個体を集団に所属させる手段となるもの。

⑤ 人間の挨拶のように、共同体の仲間を顔見知りであるかどうかで見分け、顔見知り以外の方はすべて敵とみなすというような、共同体の安全を守るために機能するよりどころにあたるもの。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

21

① あらゆる生物が「私」という意識を持っているかどうかは解明されていないが、社会性のある生物には「我ら」を見分けるための独自のメカニズムが備わっていることから類推することができる。

② 生物の世界では、自分が所属する集団の特性に反した行動をしたり他集団の「奴ら」を「我ら」と認識して敵と協力したりすることは、集団に不利益をもたらし、進化を妨げる原因になる。

③ 集団のサイズが大きくなり、行政上の範囲ごとの区切りによって「我ら」の範囲が決まるようになった人間は、顔見知り以外も「我ら」と認めざるを得ず、小さい集団で暮らしていた頃のような仲間意識は失われた。

④ 生物の集団においては、自分たちの集団の同一性に反する者を敵とみなして襲うというメカニズムを持つことは共通しているが、同一性を発揮する物質は匂いや声など生物の種類によって異なる。

⑤ 個体の生物は「私」の体の範囲内で有利になるような行動をしており、集団に所属する生物の場合は「我ら」の範囲を明確に理解し、「我ら」の生命を守りこれを害する他者と争う行動をとっている。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

弁少将（本文では「少将」）橘氏忠は、神奈備の皇女への恋が成就しないまま、遣唐副使に任命されて渡唐することになった。両親が見守るなか、遣唐大使である宰相らと共に舟で出発した。

少将はさまざまかへりみのみせられて、心細く悲しきにも、かの皇女の御文をぞあたり去らず持たまへる。

（注） たぐへける人の心や通ふらんおもかげ去らぬ波の上かな

わたのはら沖つ潮合に浮かぶ泡をともしふ舟のゆくへ知らずも

宰相も若き妻子をとどめてひとり出でたれば、 老いの涙添ひて、

春日なる三笠の山の月かげは我が舟乗りに送り来らしも

思ひしよりも雨風のわづらひなくして、七日といふにぞ、近くなりぬとて、浦の気色はるかに見え、岩のさまなべてならずおもしろき。その夜、明州といふところに着きて、ことのよし、かの国の御門に奏せさす。

まづこの国の守出でむかひて、文作り、遊びなどす。人の語らふ声、鳥のさへづる音も、見し世に似ずめづらしくおもしろきに、ゆくへなかりつるながめは、少し紛れぬれど、さまざま思ひ出でらるること多くて、来しかたの海をはるかながむれば、青き波かすかに隔てて、雲の幾重とも知らぬに、ある限り物悲しきなかにも、少将は、さまざま忘れぬ面影添ひて、うち涙ぐむ気色を、知らぬ国の人もあはれと見て、旅寝も露けかるまじう思ひおきてつつ、こまかに心しらへば、宰相もかたみに文作り交して、興ありと思へれば、かくめづらしき人の出で来添ふを、なほかしこき国と思へり。

ほどなく召しありて、都に参るほど、はるかに遠き山、河、野原を過ぎ行けば、きびしき道、さがしき山を越えつつ行くに、五月の雨晴れず、いと笠宿りもわづらはしけれど、都に参りぬれば、このころ、御門三十余ばかりにて、いみじき聖の御代なり。

未央の前殿に出でたまひて、この人々を召さる。衛府のつかさども、いつくしく陣を引きて守りたてまつるなかを分けて、御前に参るほど、まづ樂の声をととのふ。すぐれたる限りなれば、くちをしきことなし。次に文など作りて、おのおの試みたまふに、この少将、才のほどを御覧するに、けしうはあらずかしこきはさるものにて、かたちのいとめでたきを御目とどめて御覧す。「年いくらにかなる」と問ひたまへば、宰相、十七になるよしを申す。「いまだいはけなかりけるほどを、いかでかばかり、はたありけむ」とあはれがらせたまふ。

いと若きうちに、かたちのすべて世になきさまなれば、あはれにおぼされて、遠くも遣はさず、宮近きあたり、時の大臣におほせられて、さるべき心まうけども、えも言はずせさせたまふ。

明け立てば、宮の内に召して、さまざまの道を試み、習はⁱⁱさせたまふ。なにごとにも、すべて本の国の人、及びがたくのみあるにつけて、人はめ^えざましう思ふかたもあれど、御門御覧するやうありて、いみじう恵みかへりみたまふ。この人ひとりを召し抜きて、いとけ近く語らはせたまふを、大臣、さるべき人々も、なほわざと文をたてまつり、言葉を尽くしていさめたてまつる。

「我が君、天^{あめ}の下しろしめしより、いさめごとに従ひ、政を治めたまふこと、流れに棹^{さそ}を下すがごとし。いやしき草刈^{(注)くさかり}、山がつのことまで捨てたまはず。いまはるかなる境より渡り参れる旅人の、よはひ至らぬを近づけ用ゐたまふこと、御代のきずとなりぬべし」

といさめたてまつるを、まことにあやしきまで用ゐたまはず。

^(注)「漢武の金日磾^{きんじちくい}、我が国の人にあらざりき。人を用ゐることは、ただそのかたち、心に従ふべし」

とのたまひて、いとど親しくのみならせたまふを、あやしきまで思ひあへれど、げに、かたち、身の才たらひて、見えぬさまなるを、あはれに御覧すれば、いみじう時め^おかさせたまふ。道々のこと、文の心をもいとなつかしうのたまはせ知らするに、いくばくの日数ならねど、さとり深くのみなりゆく。

〔松浦宮物語〕による)

(注) たぐへける人——私(少将)の身に伴わせてくれた神奈備の皇女。
未央の前殿——「未央」は漢の時代に造られた長安にある宮殿。「前殿」は前方の表御殿。
衛府のつかさども——宮殿を警備する役人たち。
草刈、山がつ——馬の飼料の草を刈る者と、炭焼きや獵師などに従事する山に住む者。
漢武の金日磾——「漢武」は前漢の武帝のこと。「金日磾」は匈奴王の太子だったが、漢に降伏して武帝に仕え、武帝から親愛された。

問1 傍線部ア～エの古語の読みを、現代仮名遣いを用いてひらがなで記せ。ただし、ウは三字で答えること。

ア	気色	22
イ	守	23
ウ	幾重	24
エ	才	25

問2 波線部あゝおの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ かたみに

26

- ① かしこまって
- ② 記念として
- ③ たがいに
- ④ 急に
- ⑤ 面白半分に

い けしうはあらず

27

- ① このうえなく
- ② 思いがけず
- ③ 疑いようもなく
- ④ 悪くはなく
- ⑤ 見た目に違わず

う いはけなかりけるほど

28

- ① 様変わりするころ
- ② 不慣れであるころ
- ③ 心細くなるころ
- ④ 落ち着きのないころ
- ⑤ 若く幼いころ

え めざましう

29

- ① 頼もしく
- ② 気にくわなく
- ③ めずらしく
- ④ すばらしく
- ⑤ 見苦しく

お 時めかさせたまふ

30

- ① ご寵愛^{ちようあい}になる
- ② お仕えする
- ③ 感謝なさる
- ④ 驚きなさる
- ⑤ お慰めになる

問3 二重傍線部 i ～ iii の主体として最も適當なものを、後の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度選んでもよい。

i 御覽ず

31

ii 習はさせたまふ

32

iii 見えぬさまなる

33

① 少将

② 宰相

③ 御門

④ 衛府のつかさども

⑤ 大臣

問4 波線部 a 「えも言はずせさせたまふ」の文法的説明として最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

34

① 副詞＋係助詞＋動詞＋助動詞＋動詞＋助動詞＋動詞

② 副詞＋動詞＋助動詞＋動詞＋助動詞＋動詞

③ 副詞＋動詞＋助動詞＋助動詞＋助動詞＋動詞

④ 副詞＋係助詞＋動詞＋助動詞＋助動詞＋助動詞＋動詞

⑤ 副詞＋係助詞＋動詞＋助動詞＋助動詞＋動詞＋動詞

問5 傍線部 A 「思ひしよりも雨風のわづらひなくして、七日といふにぞ、近くなりぬとて、浦の気色はるかに見え、岩のさまなべてならずおもしろき。」に関する表現や語句の説明として最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

35

① 「浦の気色はるかに見え」は、天氣が良いことから、日本の海岸が遠くからでもよく見えるということを表している。

② 「思ひしよりも」は、唐に着くまでの天候に恵まれて、予定していた七日よりも早めに着いたという意味である。

③ 「七日といふにぞ」の「ぞ」は係助詞で、その結びとして「近くなりぬ」の「ぬ」が完了の助動詞「ぬ」の連体形となっている。

④ 「なべてならず」は「普通ではなく」という意味で、唐の海岸の様子が日本と異なっていることを表している。

⑤ 「おもしろき」には、ようやく唐に着くことができたという、遣唐使一行の心のはずみが表現されている。

問6 傍線部B・Dの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

B ゆくへなかりつるながめ

36

- ① 見たことがなかった光景
- ② やみそうもなかった長雨
- ③ 遠く果てがないような景色
- ④ 晴らすことができない恋の恨み
- ⑤ 行くあてのなかったもの思い

D すぐれたる限りなれば、くちをしきことなし

37

- ① 衛府の役人たちは抜きん出た人ばかりなので、隊列の整い方に残念なところがない
- ② 御門の御代は素晴らしいことこの上ないので、対面の儀式にがっかりすることがない
- ③ 遣唐使一行はきわめて優れた人ばかりなので、雅楽の音に期待外れのことがない
- ④ 少将はすべての方面に、驚くほど秀でているので、御門への対応にも落ち度がない
- ⑤ 少将の楽の音はこれ以上ないほど優れているので、御門の前でも臆することがない

問7 傍線部C「旅寝も露けかるまじう思ひおきてつつ」とあるが、どういうことか。最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

38

- ① 唐の人が、少将の寝所が湿りがちにならないように心を配るということ。
- ② 少将が、旅先での宿泊のわびしきで涙つぽくならないように心に決めるということ。
- ③ 少将が、唐の人にこれ以上不憫ふびんだと思われないように心に決めるということ。
- ④ 唐の人が、少将が異国の地で涙がちにならないように心を配るということ。
- ⑤ 少将が、唐での一人寝で神奈備の皇女を思い出さないように心に決めるということ。

問8 傍線部E「まことにあやしきまで用ゐたまはず」とあるが、どういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 39

① 少将のような年若い者を近づけてはいけないという家臣からの諫言かんげんを聞いて、御門が本当に年若く身分の低い者を用いなくなったということ。

② 家臣たちの、少将だけをそば近くに召して登用するのはよくないという意見を、御門が不思議なほど聞き入れなかったということ。

③ 人を用いる際に、その人の容貌や学才だけで判断してはいけないという家臣からの意見を聞いて、御門がおかしなほど反対したということ。

④ 家臣たちの、他国から来た人々ばかりを用いずに、わが国の人も重用するべきだという諫言を、御門が全く聞かなかったということ。

⑤ 少将のような遠い国から来た者を優遇するのはよくないという家臣からの意見を聞いて、御門がその家臣を全く登用しなくなったということ。

問9 本文中の二か所の空欄□に共通して入る語として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 40

① よも

② やをら

③ まして

④ など

⑤ なべて

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 41

① 少将の容貌が美しく、学才も豊かであることに感動した唐の大臣は、家臣に命じて少将の住居などをすばらしく整えさせた。

② 宰相は舟出に際し、妻の面影が月に映って唐に旅立つ自分を見送ってくれているようだという和歌を詠んで、涙を流した。

③ 唐の御門の治世は三十年あまり続き、紛争をおさめ、政務を執行することが川の流れる棹さおをさして下るように順調であった。

④ 唐に着いて御門の出迎えを受けた遣唐使一行は、漢詩を作ったり管弦を催したりしたが、日本を思っても悲しくなることもあった。

⑤ 少将は、唐に着いてからどれほど日数がたたないうちに、御門との会話を通して学問や詩文の知識をどんどん深めていった。

(国語の問題は終わり)